

評・池谷 裕一（脳研究者 東京大准教授）

複雑さと共に暮らす デザインの挑戦

LIVING WITH COMPLEXITY

D.A.ノーマン著

新曜社 2800円

海外のホームページを見ていると、国内のサイトと雰囲気が異なることに気づく。全般的に文字やイラストが少なくすっきりしているのだ。著者は「（東洋のサイトは）どちらがどちらした色や動画で空間を埋め尽くそうとしている。アジアで好まれるデザインは欧米で趣味が良いとされる基準を破っている」と指摘する。これは批判ではない。彼は簡素なものが生活をややがあるとしつつも、「簡単なものが生活をややこしくしている」と独自の視点を披露する。

多くのデザイナーは「扱いやすさ」を「見かけの簡単さ」と同一視するが、実際には、シンプルなものが使いやすいとは限らない。「携帯電話やマウスにボタンが一つしかないほうが操作は簡単だろか」。アップル社で上級研究員まで務めた著者ならではの問題提起だ。

複雑さは「もの」の状態を、わかりにくさは「心」の状態を表す。両者を混同してはならない。高度な科学技術に支えられた現代では「複雑さ」は避けられないはずだ。つまり、簡素さは最終目標にはならないし、そもそも、スマート

ややこしい「簡単さ」



◇Donald Norman=アップル勤務の後、米ノースウェスタン大教授、韓国科学技術院特別客員教授を歴任。

トさを至上とする姿勢はまちがっている。

私は毎朝コーヒーを淹れる。豆挽きから機器洗浄までの手順は煩雑だが、儀式のように連日繰り返される。「儀式は人生に複雑さを加えるが、文化的意味と関与感も与える。コーヒー愛好家にとっては、楽しみと喜びを人生にもたらす」。

複雑さが避けられないときでも、その手続きを反映したものであれば、許容でき、理解でき、学習できる——こう説く著者は、複雑さと共に暮らすための道標として、「シグニファイア」という概念を導入する。人を適切な行動に導くサインのことだ。デザイナーはこのサインを意図的に込めるべきだと力説するのだ。そのためには必要なものは人への共感。シグニファイアに見守られてこそ人類は複雑さと共生できるのだ、と。伊賀聰一郎、岡本明、安村通晃訳。